松本清張全集1

文藝春秋

松本清張全集1　点と線・時間の習俗・影の車

定価　1400円

1971年4月20日第1刷　1978年4月15日第6刷

著　者　©松本清張

発行者　樫原雅春

発行所　株式会社 文藝春秋

〒102　東京都千代田区紀尾井町3

電話(代表)03—265・1211

印刷所　凸版印刷株式会社

落丁乱丁はお取替えします

点と線　3
時間の習俗　115
影の車　279
解説　平野　謙　425

装 幀 伊 藤 憲 治

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

点と線

一目撃者

1

安田辰郎は、一月十三日の夜、赤坂の割烹料亭「小雪」に一人の客を招待した。客の正体は、某省のある部長である。

安田辰郎は、機械工具商安田商会を経営している。この会社はここ数年に伸びてきた。官庁方面の納入が多く、それで伸びてきたといわれている。だから、こういう身分の客を、たびたび「小雪」に招待した。

安田は、よくこの店を使う。この界隈では一流とはいえないが、それだけ肩が張らなくて落ちつくという。しかし座敷に出る女中は、さすがに粒が揃っていた。

安田はここではいい客で通っていた。むろん、金の使い方はあらい。それは彼の「資本」であると自分でも言っていた。客はそういう計算に載る人びとばかりであった。もっとも、彼はどんなに女中たちと親しくなっても、あまり自分の招待した客の身分をもらしたことはなかった。

現に、去年の秋から某省を中心として不正事件が進行していた。それには多数の出入り商人がからんでいるといわれている。現在は省内の下部の方だが、春になればもっと上層へ波及するだろうと新聞は観測していた。

そういう際でもあった。安田はさらに客について用心深くなった。客によっては、七度も八度も同じ顔があった。女中たちはコーさんとか、ウーさんとか言っているが、素性は全然知らされなかった。が、安田の連れてくる客のほとんどが、役人であるらしいことは、女中たちは知っていた。

しかし、招待客はどうでもよい。金を使うのは安田であった。「小雪」は、彼を大事にしておけばよかった。

安田辰郎は、四十ぐらいで、広い額と通った鼻筋をもっていた。色は少し黒いが、やさしい目と、描いたような濃い眉毛があった。人がらも商人らしく練れて、あっさりしている。女中たちには人気があった。しかし安田はそれに乗って、誰に野心があるというでもなさそうだった。彼は誰にたいしても、同じように愛想がよかった。

係の女中は、はじめ当番をもった因縁で、お時さんがなっていたが、座敷だけの気やすさで、それ以上に出る模様もなさそうだった。

お時さんは、二十六だが、年齢を四つぐらい若く言ってもいいくらいに、色が白くてきれいである。黒瞳の勝った大きい目が客に印象を与えた。客に何か言われて、微笑を含んだ上目使いで睨む表情が相手をよろこばした。当人はそれを心得てする仕ぐさであろう。瓜実顔で、唇とあごの間がせまく、横顔がきれいだった。

それくらいだから、客の中には誘惑する者もあったらし

い。ここの女中はみんな通いである。午後四時ごろに出てきて十一時すぎには帰る。その帰りを待って、新橋駅のガード下あたりに来てくれと誘う者がある。客の言うことだからすげなくは断われない。ええ、いいわと返事して、三回も四回もすっぽかしてしまう。彼女に言わせると、それでたいてい察しをつけてほしい、のだそうである。

「血のめぐりの悪いくせに怒ってんのよ。このあいだお座敷に来て、いやと言うほどつねるのよ」

お時さんは、すわったまま、着物をめくってちらりと膝を朋輩に見せた。白い皮膚の上に、うす青い痣のようなものが一点に鬱血していた。

「ばかだな。君があんまり気を持たせるからさ」

と安田辰郎は、その場で杯を含みながら笑って言った。つまり安田は、それだけ気のおけない客になっていた。

「そういえば、ヤーさん、ちっともあたしたちをくどかないわね」

と、女中の八重子が言った。

「くどいてもはじまらんよ。どうせ肩すかしをくう組だからな」

「やあい、あんなことを言ってる。あたし、ちゃあんと知ってるわ」

と、かね子がはやした。

「おいおい、変なことを言うなよ」

「だめよ、かねちゃん」

と、お時さんが言った。

「ここの女中は、みんなヤーさんに惚れてるんだけど、ちっとも振りむいてもらえないのよ。かねちゃん、早いとこあきらめなさいな」

「へーんだ」かね子は、歯を出して笑った。

じっさい、お時さんの言うとおり、「小雪」にいる女中は、多少とも安田に興味を抱いていた。くどかれたら、考えてみる気になるかもしれない。それだけの女好きのする魅力を、安田の顔と人がらは持っていた。

だから、その晩、某省の役人の客を先に玄関に見送って座敷に帰った安田が、もう一度くつろいで飲みなおして、ふと、

「どうだい、君たち、明日、飯をご馳走してやろうか？」

と言ったとき、そこにいた、八重子ととみ子が、一も二もなくよろこんで承知した。

「あら、お時さんがいないわ。お時さんも連れて行ってあげてよ」

とみ子が座敷を見まわして言った。お時さんは、何かの用事で出て行っていた。

「いいよ。君たち二人でいいよ。お時さんはこの次にしよう。あまり大勢で空けたら悪いよ」

それはそのとおりだった。女中たちは四時には店にはいらねばならない。夕飯をおごってもらえば遅くなる。三人も遅れたのではまずいにきまっていた。

「じゃ、明日、三時半に、有楽町のレバンテにこいよ」
安田は、目もとを笑わせながら言った。

2

翌日の十四日の三時半ごろ、とみ子がレバンテに行くと、安田は奥の方のテーブルに来て、コーヒーを飲んでいた。
「やあ」
と言って前の席をさした。店で見なれている客を、こんな所で見ると、気持がちょっとあらたまった。とみ子はなんとなく頬を上気させてすわった。
「八重ちゃんはまだですの？」
「もうすぐ来るだろう」
安田は、にこにこして、コーヒーを言いつけた。五分もたたないうちに、八重子も、妙に恥ずかしそうにしてはいって来た。近くには若いアベックが多く、一目でその方の勤めと知れる二人の和装の女は目立った。
「何をご馳走しよう。洋食か、天ぷらか、鰻か、中華料理か？」安田はならべた。
「洋食がいいわ」
二人の女はいっしょに返事した。日本食の方は、店で見あいているらしかった。
レバンテを出ると、三人は銀座に向かった。この時間なら、銀座もそう混んではいない。天気はよかったが、風は冷たかった。ぶらぶらと歩いて、尾張町の角から松坂屋の方に渡った。二週間前の年末と打って変わって、銀座も閑散だった。
「クリスマスの晩はすごかったわねえ」
安田のすぐ後で、二人の女はそんなことを言いあっていた。
安田は、コックドールの階段をのぼった。ここも空いていた。
「さあ、なんでも好きなものを言いたまえ」
「なんでも結構だわ」
八重子もとみ子も、いちおう遠慮したが、やがてメニューをかかえて相談しはじめた。なかなか決まらなかった。
安田は、腕時計をそっと見た。八重子がそれを目ざとく見つけて、
「あら、ヤーさん。おいそがしいの？」
と目を向けた。
「いや、いそがしくはないが、夕方から鎌倉に行く用事がある」
安田が卓の上で指を組んで言った。
「あら、悪いわ。じゃ、とみちゃん、早く決めましょうよ」
それでようやく決定した。
スープからはじまったから、料理が終わるまで、かなりな時間をとった。三人はとりとめのないことをしゃべりあった。安田はたのしそうだった。フルーツが出たとき、彼

は、また時計を見た。
「あら、お急ぎになるんじゃない？」
「いや、まだ、いいよ」
安田はそう答えた。しかし、つぎのコーヒーが出たとき、彼はもう一度、カフスをめくった。
「もう、お時間でしょう。失礼しますわ」
と、八重子が腰を浮かしそうにして言った。
「うん」
安田は、煙草をすいながら、目を細めて何か考えるようにしていたが、
「どうだい、君たち。このまま別かれるんじゃ、おれ、ちょっと寂しいんだ。東京駅まで見送ってくれよ」
と言いだした。半分、冗談ともつかず、本気ともつかぬ顔つきだった。
二人の女は顔を見あわせた。彼女らも、いいかげん、店にはいるのが遅れている。この上、東京駅に行って来たのではもっと遅れる。しかし、このとき、安田辰郎の表情には、さり気なさそうにしているが、妙に真剣なものがあった。ほんとうに寂しいのかな、と女たちは思ったほどだった。それにご馳走になった手まえ、すげなく突っぱなすのも悪い気がした。
「ええ、いいわ」
と先に思い切ったように言ったのは、とみ子だった。
「お店に、も少し遅くなるからと、電話で断わってくるわ」
そう言って、彼女は電話のある方へ立って行ったが、まもなく、にこにこして戻って来た。
「なんとか言っておいたわ。じゃ、お見送りに行きましょう」
そうか、悪いな、と言って安田辰郎は立ちあがった。このとき、彼はまた腕時計を出した。よく時計を見る人だと女たちは思った。
「何時の電車にお乗りになるの？」
八重子がきいた。
「十八時十二分か、その次に乗りたい。今、五時三十五分だからな、これから行けばちょうどいい」
安田はそう言いながら、せかせかと勘定を払いに歩いた。
車は駅に五分ぐらいで着いた。車のなかで、安田は、
「すまんなあ」
とあやまっていた。八重子もとみ子も、
「いいわよ。ヤーさん。これぐらいのサービスしなきゃ、こちらが悪いわ」
「そうよ、ねえ」
と言っていた。
駅につくと安田は切符を買い、二人には入場券を渡した。鎌倉の方に行く横須賀線は十三番ホームから出る。電気時計は十八時前をさしていた。
「ありがたい。十八時十二分にまに合うよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

と安田は言った。

だが、十三番線には、電車がまだはいっていなかった。安田はホームに立って東側の隣のホームを見ていた。これは十四番線と十五番線で、遠距離列車の発着ホームだった。現に今も、十五番線には列車が待っていた。つまり、間の十三番線も十四番線も、邪魔な列車がはいっていないので、このホームから十五番線の列車が見とおせたのであった。

「あれは、九州の博多行の特急だよ。あさかぜ号だ」

安田は、女二人にそう教えた。

列車の前には、乗客や見送り人が動いていた。あわただしい旅情のようなものが、すでに向かい側のホームにはただよっていた。

このとき、安田は、

「おや」

と言った。

「あれは、お時さんじゃないか?」

え、と二人の女は目をむいた。安田の指さす方向に瞳を集めた。

「あら、ほんとうだ。お時さんだわ」

と、八重子が声を上げた。

十五番線の人ごみの中を、たしかにお時さんが歩いていた。その他所行の支度といい、手に持ったトランクといい、その列車に乗る乗客の一人に違いなかった。とみ子もやっとそれを見つけて、

「まあ、お時さんが!」

と言った。

3

しかし、もっと彼女たちに意外だったことは、そのお時さんが、傍の若い男と親しそうに何か話していることだった。その男の横顔は、彼女たちに見おぼえがなかった。彼は黒っぽいオーバーを着て、これも手に小型のスーツケースをさげている。二人は、ホームの人の群の間を、見えたり隠れたりして、ちらちらしながら列車の後部の方に向かって歩いていた。

「まあ、どこに行くんでしょう?」

八重子が息をのんだような声で言った。

「あの男の人、誰でしょうね?」

とみ子もかすれた声を出した。

三人の目にさらされているとは知らずに、お時さんは、連れらしい男といっしょに歩いていたが、やがて一つの車両の前に立ちどまって、列車の車両番号を見ていたが、ついと男の方から先に内部にはいって、姿を消してしまった。

「お時さんも、なかなか隅におけないね、彼氏と九州まで旅行するのかな?」

安田は、一人でにやにやしていた。

二人の女は、まだ棒のように立っていた。びっくりした表情が、まだ顔からさめていない。お時さんが姿を消した

車両を見つめて声をのんでいた。その前には絶えず旅客が動いている。
「お時さんは、いったいどこへ行くのかしら？」
八重子がやっと言った。
「特急に乗るなんて、近い所じゃないわね」
「お時さんにあんな人がいたの？」
とみ子が声をひそめた。
「知らないわ。意外だわね」
二人は大変なものを見つけたように、低い声で言いあった。
八重子もとみ子も、じっさいはお時さんの私生活をよく知っていなかった。彼女は、あまり自分のことはしゃべりたがらない方である。結婚はしていないらしい。恋人がある様子もないし、浮いた噂も聞かなかった。いったい、そういう店に勤めている女には、朋輩になんでもあけすけに話したり、相談したりする型と、自分のことは石のように黙っている型とがあるらしい。お時さんは、その黙っている方だった。
だから二人の女は、知らない彼女の一部分を偶然に発見した思いで、衝撃をうけたのだろう。
「どんな男か、あのホームまで行って窓からのぞいてやるわ」
八重子がはずんだ声で言った。
「よせ、よせ。他人のことは放っとくものだ」
安田が言った。
「ああら、ヤーさん、妬かないの？」
「妬くものか。おれもこれから女房に会いに行くんだ」
安田は笑った。
そのうち横須賀線の電車がはいってきた。これは十三番線だから、この電車のために、十五番線のホームはかくれて見えなくなってしまった。あとで調べたときに、この電車は十八時一分にホームに到着したことがわかった。
安田はその電車に片手をふりながら乗った。これは十一分後に出るから、しばらく間がある。
安田は窓から顔を出して、
「もう、いいよ。いそがしいだろうから、帰ってくれたまえ。ありがとう」
と言った。
「そうね」
と、八重子が言ったのは、これから十五番ホームに駆けて行って、お時さんとその相手をのぞいてみたい気持が動いていたからである。
「じゃ、ヤーさん、失礼するわ」
「行っていらっしゃい。また、お近いうちにね」
二人の女は安田と握手して離れた。
階段をおりながら、八重子が、
「ねえ、とみちゃん、お時さんをちょっとのぞいてみないい？」

と誘った。
「わるいわ」
と、とみ子も言ったものの、まんざらでもないらしい。
二人は、そのまま、十五番ホームに駆けあがった。
たしかに、それと思われる特急の車両の近くに寄って、見送りの人たちの間から、窓を見た。車内は贅沢に明かるい。その光線は、座席にすわったお時さんと横の若い男とを、あざやかに浮き出した。
「まあ、お時さんはたのしそうに話しているわ」
八重子が言った。
「ちょっと男前ね。いくつぐらいかしら」
とみ子は男の方に興味をもった。
「二十七八かな。九ぐらいかしら」
八重子が目を凝らした。
「お時さんより、少し上ぐらいね」
「内にはいって、ひやかしてやりましょうか」
「およしよ、八重ちゃん」
さすがにとみ子はとめた。それからしばらく二人の様子を観察していたが、
「さ、行きましょ。遅くなったわよ」
と、まだ未練げに見ている八重子をうながした。
二人の女は、「小雪」に帰ると、さっそく、女将に報告した。女将も意外だったらしい。
「へえ。そうなの？　お時さんからは、昨日、五六日郷里に帰るから休ませてくれと言われていたんだけど、へえ、男の人とねえ」
と、目をまるくしていた。
「じゃ、きっと口実よ。だって、お時さんは秋田の方だと言ったじゃないの」
「あんなおとなしい女が見かけによらないのね。京都あたりを、いい気持で遊んで歩くのかもしれないわ」
三人は顔を見あわせた。
その翌晩、安田が、また客を連れてきた。例によって客を送り出してから、
「どうだい、お時さんは今日はお休みだろう？」
と、八重子に言った。
「今日はお休みどころじゃないわよ。一週間ぐらい休むらしいのよ」
八重子が眉を上げて告げた。
「ほう。じゃ、あの男と新婚旅行か？」
安田は杯を口からはなしながら言った。
「そうなのよ。あきれたもんね」
「あきれることはないさ。君たちもやればいいじゃないか？」
「おあいにくさまね。それとも、ヤーさん、連れて行ってくれる？」
「おれか。おれはだめだ。そう何人も連れて行けない」
そんなことを言いあって、安田は帰ったが、仕事の都合

なのか、また、あくる晩に二人の客を連れてきて飲んだ。
このときも、とみ子と八重子が座敷に出たので、安田との間に、お時さんのことが話題となった。
しかし、そのお時は、同伴の男といっしょに、思いもかけぬ場所で、死体となって発見されたのである。

二　情死体

1

鹿児島本線で門司方面から行くと、博多につく三つ手前に香椎という小さな駅がある。この駅をおりて山の方に行くと、もとの官幣大社香椎宮、海の方に行くと博多湾を見わたす海岸に出る。
前面には「海の中道」が帯のように伸びて、その端に志賀島の山が海に浮かび、その左の方には残の島がかすむ眺望のきれいなところである。
この海岸を香椎潟といった。昔の「橿日の浦」である。太宰帥であった大伴旅人はここに遊んで、
「いざ子ども香椎の潟に白妙の袖さえぬれて朝菜摘みてむ」（万葉集巻六）と詠んだ。
しかし、現代の乾いた現実は、この王朝の抒情趣味を解さなかった。寒い一月二十一日の朝六時半ごろ、一人の労働者がこの海辺を通りかかった。彼は、「朝菜を摘む」かわりに、家から名島にある工場に出勤する途中であった。
朝は明けたばかりであった。沖には乳色の靄が立っていた。志賀島も海の中道も、その中に薄い。潮の匂いを含んだ風は冷たかった。労働者は外套の襟を立て、うつ向きかげんに、足早に歩いていた。この岩の多い海岸を通ることが、彼の職場への近道であり、毎日の習慣であった。
が、習慣にないことが、そこに起こった。彼のうつ向いた目が、それをとらえた。黒い岩肌の地面の上に、二つの物体が置かれていた。いつもの見なれた景色の中に、それは、よけいな邪魔物であった。
まだ陽の射さない、青白く沈んだ早朝の光線の中に、物体は寒々と横たわっていた。じっさい、衣類の端は寒そうに動いていた。が、動いているのはそれと、髪の毛ぐらいなものであった。黒い靴も、白い足袋も固定したままであった。
労働者の平静が破られて、いつもの習性とは異なった方向へ、彼の足を走らせた。彼は町の方へ駆けて行き、駐在所のガラス戸を叩いた。
「海岸に死人がありますばい」
「死人が」
と、起きてきた老巡査は、冷たそうに上着の釦をかけながら、通告人の興奮した声を聞いた。
「はあ。二人ですたい。男と女のごつありましたやな」
「どけえあったな？」

巡査は起きぬけの事件に、びっくりしたように目をむいた。

「すぐ、そこの海ばたですたい。あたしが案内ばしまっしょ」

「そうな。じゃ、ちょっと待ちんしゃい」

巡査は少しあわてていたが、それでも届出人の住所氏名を書き取り、香椎の本署に電話で連絡をとった。それから二人で交番を急いで出た。二人とも、白い息を凍った空気の中に吐いていた。

もとの海岸の場所に引きかえすと、二つの死体はやはり汐風にさらされて横たわっていた。労働者は、こんどは巡査がついてきたので、少し落ちついて、その物体を眺めることができた。

男よりも、女の方が先に目についた。女は仰向けに顔を見せていた。目は閉じていたが、口は開いて白い歯が出ている。顔はバラ色をしている。鼠色の防寒コートの下には、海老茶色のお召の着物があり、白い衿が、ややはだけていた。着衣は少しも乱れていない。行儀よく寝ていた。ただ裾前が、風に動いて、黄色な裏地を見せていた。きちんと揃えた脚には、清潔な足袋があった。土には汚れていない。すぐ横に、これもていねいに揃えたビニールの草履があった。

労働者は、つぎに男に目をやった。男の顔は横を向いていた。これも頬は、生きている人のように血色よく見えた。まるで酔って眠っているようである。濃紺のオーバーの端から茶色のズボンがのびて、黒い靴をはいた足をむぞうさに投げ出していた。靴は手入れがとどいていて、なめらかに光っていた。紺に赤い縞のある靴下がのぞいていた。

この男女の二つの死体の間は、ほとんど隙間がなかった。岩の皺の間を、小さな蟹がはっていた。蟹は男の傍にころがったオレンジ・ジュースの瓶にはいあがろうとしていた。

「心中したばいな」

と、老巡査は立って見おろしながら言った。

「かわいそうに。年齢もまだ若いごつあるやな」

あたりが、だんだん昼の色に近づいてきた。

2

香椎署からの連絡で、福岡署から刑事部長と刑事が二名、警察医、鑑識係などが車で来たのは、それから四十分後であった。

死体をいろいろな角度から撮影しおわると、背の低い警察医が、しゃがみこんだ。

「男も女も、青酸カリを飲んでいますな」

医者は言った。

「この、きれいなバラ色の顔色がその特徴です。このジュースといっしょに飲んだのでしょうな」

ころがったジュース瓶の底には、飲み残しの橙色の液体がたまっていた。

「先生、死後どれくらい経過していますか？」
刑事部長がきいた。彼は小さな髭をたくわえていた。
「帰ってよく見なければ分からんが、まず十時間内外かな」
「十時間」
部長はつぶやいて、あたりを見まわした。計算すると、それは前夜の十時か十一時ごろになる。部長の目は、そのときの情死の光景を想像しているようであった。
「女も男も同時に薬を飲んだのですね？」
「そうです。青酸カリ入りのジュースを飲んだのですな」
「寒い場所で死んだものですね」
小さい声で、ほとんど呟くように、ひとりごとを言う者がいた。警察医はその声の主を見あげた。よれよれのオーバーを着た四十七八の、痩せた風采のあがらぬ男だった。
「やあ、鳥飼君」
と医者は、その刑事のしなびた顔に話した。
「そんな考えは、生きているやつの言うことでね。死場所に寒いも暑いもないだろう。そういえばジュースだって冬向きではないね。それに当人たちは」
と医者は、ちょっと笑った。
「倒錯的な心理があるんじゃないかな。普通の状態とは逆な、倒錯した一種の恍惚的な心理が」
背の低い警察医が、そんな不似合な文学的な言葉をつかったので、刑事たちの間に、小さな笑いが起こった。
「それに、毒薬をのむということは、やはり決断がいるからね。やはりそういう心理の力で死ぬことを望むだろうな」
部長もそんなことを言った。
「部長さん。こいは無理心中じゃなかでっしょな？」
刑事の一人が訛をまる出しにして言った。
「無理心中じゃないね。着衣の乱れもないし、格闘した形跡もない。やはり合意の上で、青酸カリをのんで死んだのだな」
それは、そのとおりであった。女の姿態は、行儀よく横たわっていた。白い足袋は、傍にきちんと揃えられてあるビニール草履から、脱いだばかりのようにきれいだった。両手は前に組みあわせていた。
あきらかに、情死とわかったので、刑事たちの顔には、弛緩した表情があった。犯罪がなかったという手持無沙汰がどこかあった。つまり、犯人を捜査する必要がなかったのである。
二つの死体は、運搬車で署に持ち去られた。刑事たちも寒そうに肩をすくめながら車に乗った。あとは、邪魔ものなくなった香椎潟が、弱い冬の朝の陽を浴びて、風を動かしながら、おだやかに残った。
署にかえった死体は、綿密に検査された。それは衣類を一枚ずつ剝ぐたびに写真に撮るという念の入った方法である。
男の上着のポケットから名刺入が出た。身もとはそれに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com